研　究　報　告

Maternity diaryを使用した母体胎児集中治療室（MFICU）入院中の切迫早産妊婦の思い

児玉　一枝

Thoughts expressed in a “Maternity diary” by pregnant women with threatened premature delivery hospitalized at the Maternal and Fetal Intensive Care Unit（MFICU）

Kazue Kodama

キイワード：Maternity diary、MFICU、切迫早産
key words：Maternity diary，MFICU，threatened premature delivery

Abstract

The aim of the present study was to elicit the thoughts of pregnant women with threatened premature delivery hospitalized at the Maternal and Fetal Intensive Care Unit（MFICU）using a “Maternity diary,” which is designed to promote self-monitoring of such pregnant women, and to investigate the usefulness of the “Maternity diary” based on these results in order to obtain suggestions for future obstetrical care.

Analysis of the “Maternity diary” containing the thoughts of these pregnant women revealed their reaction to the symptoms of threatened premature delivery, their physical and mental burdens, and their thoughts toward their family and the fetus. Analysis of the semi-constructed interviews revealed that these pregnant women were able to objectively accept their circumstance, remember their feelings, and express their thoughts. Moreover, self-monitoring enabled them to self-evaluate, resulting in a change in their attitude toward self-care. These pregnant women with threatened premature delivery were able to deepen their love for their fetus by expressing their thoughts in a “Maternity diary,” which contributed to the development of the mother–child relationship.

These results indicated that obstetrical care using a “Maternity diary” that is shared between nurse-midwives and pregnant women with threatened premature delivery provided opportunities for accepting the pregnant life and establishing goals, which in turn contributed to better obstetrical care.

受付日：2013年12月３日　　受理日：2014年11月６日
秋田赤十字病院　Akita Red Cross Hospital

要　旨

本研究は、切迫早産妊婦のセルフモニタリング用の日記であるMaternity diaryを使用したMFICU入院中の切迫早産妊婦の思いを明らかにすることを目的とし、その結果を基にMaternity diaryを使用する効果について検討し、今後の助産ケアの示唆を得たいと考えた。

Maternity diaryの記載内容から、MFICU入院中の切迫早産妊婦の思いを分析した結果、切迫早産症状への対処、身体的・精神的負担、家族・胎児への思いが明らかとなった。また、半構造的面接の分析結果から、MFICU入院中の切迫早産妊婦がMaternity diaryを使用することで、自身を客観的に受け止め、振り返りと思いを表現できること、セルフモニタリングの効果から、自己評価でき、セルフケアへの行動変容をもたらしていた。また、切迫早産妊婦はMaternity diaryに胎児への思いを記載しながら愛着を深め、母子関係形成を進めることに繋がっていた。

Maternity diaryを使用した助産ケアは、助産師と切迫早産妊婦が共有することで、妊娠生活の受け止めと目標への見通しを立てる機会となり、よりよい助産ケア提供の一助であることが示された。

Ⅰ．はじめに

近年わが国では、リスクの高い妊産婦や新生児に対する高度な医療提供を目的とした、総合周産期母子医療センターの整備を推進している。母体・胎児集中治療管理室（以下MFICU）は、母体搬送の受け入れや、ハイリスク妊婦の管理に対する医療に備えており、その施設数・病床数は年々増加し、母体や胎児の医療管理は著しく発展した。一般的に、MFICUに入院した妊婦は室内安静となり、ベッド上中心の生活と24時間持続の点滴管理を伴う入院環境となる。MFICUの入院環境に関する先行研究によると、個室環境に対して閉塞感を感じている妊婦は多く、気分転換を図るなど閉塞感を和らげる取り組みが求められていた（兼子・冨樫，2010，p.15）。これまでのMFICU入院中の妊婦の心理的特徴に関する先行研究では、胎児と妊婦自身の安全が脅かされ、常に安静を求められているMFICU独自の背景が、妊婦の気分・感情に影響を与えていることが明らかにされている（長濱・石崎・北村他，2007，p.4）。一方、中村（2009，p.46）は、ローリスク初産婦に対する看護介入の方法として、妊娠初期から末期にかけ継続的に、中村が作成した「マタニティダイヤリー」を使用することで、快適な妊娠生活や自分の妊娠と向き合う機会となり、妊娠に伴う不安や不快な側面の軽減に役立つ結果となったとして、その有効性を報告している。そこで、MFICU入院中の切迫早産妊婦に対しても、患者の特徴を考慮した、切迫早産妊婦のセルフモニタリング用の日記であるMaternity diary（以下、Maternity diaryと記載）を使用した助産ケアを行うことで、妊娠継続と出産に対する意欲向上の動機づけとなるのではないかと予測した。本研究は、Maternity diaryを使用したMFICU入院中の切迫早産妊婦の思いを明らかにすることを目的とし、その結果を基にMaternity diaryを使用する効果について検討し、今後の助産ケアの示唆を得たいと考えた。

Ⅱ．用語の定義

A．MFICU

総合周産期母子医療センターに設置されている母体・胎児集中治療管理室（Maternal Fetal Intensive Care Unit）の略称である。

B．切迫早産妊婦

妊娠22週以降37週未満の妊婦で、下腹部痛、性器出血、破水などの症状に加えて、子宮収縮があり、内診では子宮口の開大、子宮頸管短縮などBishop scoreの進行が認められ、切迫早産と診断された妊婦。

Ⅲ．研究方法

A．研究デザイン：質的記述的研究

B．研究参加者

東北地方の三次救急医療施設である１病院において切迫早産と診断され、MFICU個室に安静入院となった妊婦の内、切迫早産クリニカルパス使用に加え、Maternity diaryを使用した妊婦10名とし、研究の趣旨に賛同し了解が得られた者とした。

C．調査期間：平成24年６月～平成24年11月。

D．調査方法と内容

１．Maternity diaryの作成と使用方法（表１）

助産ケアのために使用するMaternity diaryは、眞鍋（2005）が作成した「ディリー・マタニティチェック」を参考とした。なお、「ディリー・マタニティチェック」の一部使用に関しては、作成者の許可を得た。本研究で使用したMaternity diaryの内容は、MFICU入院中の切迫早産妊婦という研究参加者の特徴を考慮し、眞鍋（2005）が作成した「ディリー・マタニティチェック」の項目である、「睡眠状態・体重・胎動・お腹，出血・食事・運動・生活・気持ち・母親イメージ・赤ちゃんと話す（コミュニケーション）・１日の出来事」の内、お腹、出血の項目は切迫早産症状として重要な情報で

表１．Maternity diaryの内容

今日は　月　日（　）　妊娠　週　日

	できた	時々・少しできた	できなかった	＊気が付いたこと ＊聞きたいこと
お腹の張りや痛みなく過ごすことができた。				
出血なく過ごすことができた。				
だるさなど体の不調なく過ごすことができた				
よく眠ることができた				
今日1日、ストレスなく快適に過ごすことができた。				
お腹に負担のかかる動作（急に起き上がる・長時間同じ姿勢でいる）なく過ごすことができた				
シャワーやシャンプーなど清潔に関する事を行うことができた				
食事を十分食べることができた				
お腹の中の赤ちゃんの様子をイメージすることができた。				
赤ちゃんの動きを感じることができた				
お腹の赤ちゃんに話しかけることができた				
赤ちゃんが産まれた後の生活について、想像することができた				

今日の出来事・赤ちゃんへのメッセージ

あると考え「お腹の張りや痛みなく過ごすことができた」「出血なく過ごすことができた」と２項目に分けて細かく確認できるよう作成した。MFICU個室内に入院中であることから、運動と体重の項目を除外し、生活項目の判断基準を「お腹に負担のかかる動作（急に起き上がる・長時間同じ姿勢でいる）なく過ごすことができた」と具体的な表現とした。また、持続点滴中の状況から入浴が出来ないため、清潔の項目を「シャワーやシャンプーなど清潔に関する事を行うことができた」と表現した。体調に関する情報としては、子宮収縮抑制剤の副作用を考慮し「だるさなど体の不調なく過ごすことができた」を付け加えた。母親イメージの項目は「お腹の中の赤ちゃんの様子をイメージすることができた」「赤ちゃんが産まれた後の生活について、想像することができた」と具体的な表現で２項目作成した。睡眠状態・胎動・食事、気持ち、赤ちゃんと話す、は「ディリー・マタニティチェック」の項目をそのまま使用し作成した。また、妊婦の個別な不安や意見を反映出来るよう自由記載の欄を設けた。以上のMaternity diaryの内容は、Ａ病院産科病棟師長及びMFICU担当助産師から意見を聴取し、指導教員からスーパービジョンを受け作成した。

Maternity diaryの使用方法については、MFICU入院当日の検査や病状説明が終了し落ち着いた時間帯に説明を行った。毎日自由な時間に記載してよいこと、各項目に対し「できた」「時々・少しできた」「できなかった」の中で当てはまる箇所に○を付け、自由記載欄は追加記載したい事や質問など自由に使用してよいことを説明し記載を依頼した。

２．Maternity diaryを使用した助産ケアの実施

研究参加者がMaternity diaryを開始してから連日、その日のMFICU担当者、もしくは研究者が訪室し、Maternity diaryの記載内容を研究参加者と共に読み、確認を行った。Maternity diaryの記載内容から得られた情報を基に、日勤のMFICU担当助産師２－４名でカンファレンスを行い、研究参加者に必要な身の回りの援助や、情報の提供を行った。

３．半構造的面接法による個人面接

インタビューガイドを作成し、Ａ病院産科病棟内の個室で半構造的面接を実施した。１回目の面接は「Maternity diaryを使用して感じた思い」と「Maternity diaryを通した助産師との関わり」について、MFICU入室後状態が落ち着く入院14日目もしくはMFICU退出時に実施した。２回目の面接は、「Maternity diary使用したことの振り返り」、「Maternity diary使用中の助産師との関わりについての振り返り」について、出産後４日目に実施した。

４．Maternity diaryの記載内容

研究参加者が記載したMaternity diary各項目のチェック状況の経過と、自由記載欄の言葉を収集し、データとした。

５．分析方法

Maternity diaryの記載内容、入院14日目もしくはMFICU退出時と出産後４日目に行なった半構造的面接から得られたデータを基に分析を行った。

Maternity diaryの記載内容からは「切迫早産妊婦が入院中感じていた思い」を、入院14日目もしくはMFICU退出時に行なわれた面接時の逐語録の内容からは「Maternity diaryを使用して感じた思い」「Maternity diaryを通した助産師との関わり」を、出産後４日目面接時の逐語録の内容からは「Maternity diary使用したことの振り返り」「Maternity diary使用中の助産師の関わりについての振り返り」を示した文脈を抽出し、一文にまとめコード化を行った。抽出されたコードを分類・整理しサブカテゴリーとし、更に、サブカテゴリーを意味する内容により抽象度を上げカテゴリーを抽出した。

また、研究参加者の基礎情報、入院中行われた助産ケア情報は担当助産師が記録した看護記録を参照とした。以上のデータ収集及び分析は、信頼性を高めるために、指導教員からスーパービジョンを受けた。

６．倫理的配慮

本研究は、日本赤十字秋田看護大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号24-009）。研究参加者には、本研究の趣旨と目的、方法について口頭並びに研究依頼文書を用いて説明を行った。参加は自由意

志に基づくものであり匿名性を保障すること、いつ中止・撤回しても構わないこと、研究協力を断っても不利益が生じないことを説明し理解を得た。個人は特定されず、プライバシーは守られること、研究結果は本研究以外に使用されないこと、データは厳重に管理し、研究終了後に速やかに破棄する事について説明し、研究への同意は書面へ署名で得た。署名を得た同意が得られた者を研究参加者とした。

Ⅲ．結果

A．研究参加者の背景（表２）

研究参加者数は10名、平均年齢は30.5±3.67歳であった。双胎妊婦５名、単胎妊婦５名であり、入院時の妊娠週数は妊娠25週５日から妊娠32週３日であった。妊娠歴は初産が４名、経産が６名であった。MFICU在室日数は、５日から14日で平均12.1日であり、MFICU入室期間を含む全入院日数は、７日から66日で平均33.9日であった。分娩に関しては、分娩時の妊娠週数は33週２日から39週２日であり、研究参加者の６名が早産であった。分娩方式は経膣分娩８名、帝王切開２名であった。

B．Maternity diaryに記載された切迫早産妊婦の思い（表３）

Maternity diaryに記載されていた内容の分析を行った結果、【切迫早産症状の対処への思い】【身体的負担とストレスに対する思い】【支えとなった家族への思い】【愛着を感じた胎児への思い】の４カテゴリーが抽出された。尚、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを『　』、データ引用を「*斜体*」で記した。

１．切迫早産症状の対処への思い

切迫早産妊婦は、切迫早産の症状を自分で明確に判断できず、子宮収縮が増強しないかという不安を感じていた。そのため、シャワー等の清潔行動や安静時の体勢など『子宮収縮が起こりやすい条件を自覚し行動に注意する』という思いをMaternity diaryに記載しており、「*お腹の強い張りではないが、シャワーせず横になっていた*」（B氏）と子宮収縮を感じた時、安静行動がとれていたケースもあった。『安静と点滴開始の効果を自覚する』では、子宮頸管縫縮術を受けた妊婦において、安静と点滴管理の効果として、切迫早産徴候が軽快したと感じていた。また、切迫早産妊婦は入院時に『医師のインフォームドコンセントと、助産師の説明から疾患を理解する』ことで、疾患と症状に対する知識を得ていた。

２．身体的負担とストレスに対する思い

切迫早産妊婦は、安静生活のため起こる身体的苦痛として、体力低下に伴う疲労感を自覚していた。また安静臥床による身体の痛みや、途中覚醒と入眠の繰り返しによる不眠を感じ、その思いを記載していた。また、切迫早産の治療として子宮収縮抑制剤を使用したことで、頭痛・動悸・手の震えなどの副作用による身体的苦痛を感じ、その思いをMaternity diaryに記載していた。『子宮増大に伴うつらさを感じる』では、特に双胎の切迫早産妊婦が妊娠進行に伴うマイナートラブルに対する苦痛な思いを記載していた。

切迫早産妊婦は自宅や家族から離れ、安静のためMFICUの個室入院となった状況から『MFICU入院による環境の変化に対するストレス』を感じ、思いを記載していた。また、家族を自宅に残しての入院生活という状況から『自宅や家族に関する不安、ストレスを感じる』と思いを記載していた。更に、子宮頸管縫縮術を受けた切迫早産妊婦は『手術日に高いストレスを感じる』と記載しており、ストレスを感じた内容は多

表２．研究参加者の背景　　n＝10

年　齢	入院時の妊娠週数	胎児数	妊娠歴	MFICU在室日数	退院までの全入院日数（MFICU入室期間を含む）	子宮頸管縫縮術の実施	分娩時の妊娠週数	分娩方式	児の小児科入院の有無
A氏29	25週6日	双胎	1経産	14	66	なし	34週3日	経膣分娩	あり(NICU)
B氏26	28週3日	単胎	初産	14	44	あり	37週4日	経膣分娩	なし
C氏26	29週3日	単胎	1経産	13	23	なし	39週2日	経膣分娩	なし
D氏36	25週5日	単胎	1経産	13	13	あり	38週3日	経膣分娩	なし
E氏28	29週1日	双胎	初産	14	55	なし	36週1日	経膣分娩	あり(GCU)
F氏35	29週0日	双胎	初産	13	50	なし	35週0日	帝王切開	あり(GCU)
G氏35	26週5日	単胎	1経産	7	7	あり	38週5日	経膣分娩	なし
H氏32	30週6日	双胎	2経産	14	36	なし	35週1日	経膣分娩	あり(GCU)
I氏31	32週3日	単胎	1経産	5	12	なし	33週2日	経膣分娩	あり(NICU)
J氏27	31週2日	双胎	初産	14	23	なし	33週3日	帝王切開	あり(NICU)

岐にわたって構成されていた。

3．支えとなった家族への思い

MFICU入院中の切迫早産妊婦は、多岐にわたるストレスに対し、夫や上の子など家族の面会や会話等を気分転換と感じ、ストレスの軽減に繋げていた。

4．愛着を感じた胎児への思い

切迫早産妊婦は、胎児の発育と健康に関する不安を抱えながらの入院生活であったと思いを記載していた。また、入院中の超音波検査を通して胎内での胎児の様子を想像していた。『胎動に、胎児への愛着を感じる』では、胎児に語りかける時に気づいた、母に反応するような胎動に愛着を感じ、胎児の元気さを感じていた。『家族と共に胎児に語りかけた』では、面会や電話の機会に夫や上の子と一緒に胎児へ語りかけを行い、胎児に対する愛着を家族と共有し連帯感を感じ、思いをMaternity diaryに記載していた。

表3．Maternity diaryに記載された切迫早産妊婦の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
①切迫早産症状の対処への思い	・子宮収縮が起こりやすい条件を自覚し行動に注意する	・子宮収縮の自覚がはっきり判らず不安があった 「*張りの自覚がなくても張っていたことがあり不安*」 ・シャワー等の行動で子宮収縮が増強しないかと不安があった ・安静な行動をとることでお腹の張りが軽減すると自覚できた 「*少し張ったが横になって楽になった*」 「*お腹の強い張りではないが、シャワーせず横になっていた*」 ・どんな行動を取った時、お腹が張りやすいか考えた 「*ちょっと長く起きていると張る感じ*」
	・安静と点滴開始の効果を自覚する	・子宮収縮抑制剤の効果を自覚できた 「*点滴のおかげでお腹の張りが減少した*」
	・医師のインフォームドコンセントと、助産師の説明から、疾患を理解する	・医師・助産師の説明で理解できた。 「*すごく丁寧に説明してもらって納得したし嬉しかった*」
②身体的負担とストレスに対する思い	・体力低下に伴う疲労感を自覚する	・疲れやすく体力が落ちたと自覚した 「*体力落ちすぎて不安*」
	・安静臥床による身体の痛みを感じる	・安静のため横になり、背中や腰、肩がつらい 「*どの体勢が楽なのか分からなくなってきた・・・*」
	・途中覚醒と入眠の繰り返しによる不眠を感じる	・横になるとつい眠ってしまうので夜は寝付けない ・途中覚醒しては、すぐ眠る ・夜間頻尿のため不眠と頭痛
	・子宮増大に伴う体動のつらさを感じる	・双胎妊娠による子宮増大に伴い体動がつらい 「*座っているのが苦しい。シャワーが大変だった*」
	・頭痛・動悸・手の振るえなど子宮収縮抑制剤の副作用を自覚する	・子宮収縮抑制剤の副作用のため頭痛・動悸 ・子宮収縮抑制剤の副作用のため倦怠感・手の振え 「*手の甲まで赤くなり痒い*」「*頭痛がひどい*」 「*手が震えてちゃんと書けません*」
	・MFICU入院による環境の変化に対するストレス	・MFICUの閉鎖的な入院環境にストレスを感じた 「*外の様子が見たくなりました*」 ・入院後の家の中の事に関する心配 「*月末の引越しが心配。新居の様子が気になる*」
	・手術日に高いストレスを感じる	・特に手術日はストレスを強く感じた 「*今日は手術でしたので、1日中ドキドキでした*」
③支えとなった家族への思い	・家族の面会を気分転換と感じる	・ストレスには、家族の面会が気分転換になった。 「*子供が遊びにきてくれた*」「*お義母さんがお花を飾ってくれた*」 「*久しぶりに息子とも会話できて嬉しくなりました*」
④愛着を感じた胎児への思い	・出産まで胎児の健康を心配する	・産まれるまでの不安が大きい ・発育・健康に不安。赤ちゃんに会えるのは嬉しいけど不安も大きい。 「*小さくても元気に産まれて欲しい*」
	・胎内での胎児の様子を想像した	・赤ちゃんが、お腹の中でどのような体勢なのかを考えた ・お腹の中が狭そうで心配した
	・胎動に、胎児への愛着を感じる	・お腹に手を当てると、ポコポコ動く ・お腹をトントンすると蹴り返す 「*お腹に話しかけて反応があると嬉しい*」 「*元気に動き回っている。嬉しい限り*」
	・家族と共に胎児に語りかけた	・面会時、夫や家族も一緒に話しかけたくれた 「*パパが来てお腹を触ってくれた*」 「*お兄ちゃんがお臍の穴から話しかけてくれた*」 ・電話越しに夫も赤ちゃんに話しかけてくれた ・毎日、「*一緒に頑張ろう*」と、胎児を意識し語りかけた 「*早く会いたいけど、まだお腹の中にいてくださいね*」

C．入院14日目もしくはMFICU退出時行われた面接時の妊婦の思い（表４）

面接で得られた逐語録の分析を行った結果、【Maternity diaryの記載に関した思い】【Maternity diaryを活用し感じた効果】【Maternity diaryを通した助産ケアに対する思い】の３カテゴリーが抽出された。

１．Maternity diaryの記載に関した思い

切迫早産妊婦は、Maternity diaryに対し、『簡単な方法で記載に負担はなかった』と感じていた。また、Maternity diaryを継続して記載することで『自分のものと意識し、楽しんで記載した』と感じており、日々の使用で、Maternity diaryを書くことに慣れていた。また、切迫早産妊婦の中には、「*子宮収縮抑制剤の副作用による手の震えがあり、自由記載が出来ないときがあった*」（G氏）と、書くという動作が困難である時に、Maternity diaryの『記載にとまどった時があった』と感じていた。さらに、あいまいな表現や記載方法に対する疑問や、『記載を面倒に感じた時があった』と記載しにくさも感じていた。

２．Maternity diaryを活用し感じた効果

『気持ちの変化や貴重な体験の振り返りとなった』では、Maternity diaryを読み返すことで、入院中の自分の心の変動を振り返ることが出来、頑張った評価につながったという思いを感じていた。また、『一日の記録・気づきのメモになった』では、Maternity diaryに記載された内容を、MFICU入院中の毎日の出来事、自分の気持ちの変化といった思いを振り返る材料としていた。切迫早産妊婦は、直接伝えにくい不安をMaternity diaryに記載し助産師に読んでもらうことで『不安を助産師に伝えることができた』という思いを感じていた。さらに、夫や家族の面会の機会にMaternity diaryを読んでもらう、一緒に記載することで、『家族とMaternity diaryを使用することで入院中の出来事を共有できた』という思いを感じていた。

３．Maternity diaryを通した助産ケアに対する思い

『助産師とMaternity diaryを読み、思いを共有した』では、Maternity diaryに記載していた、入院生活や切迫早産症状に対する不安の内容を助産師が丁寧に読み受け止めてくれたという思いを感じていた。また、Maternity diaryに記載されていた、入院当初や手術日などの不安が強い時、助産師の声掛けで安心したと感じていた。

表４．入院14日目もしくはMFICU退出時行われた面接時の妊婦の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
①Maternity diaryの記載に関した思い	・簡単な方法で記載に負担はなかった	・書くことに負担はなかった ・あてまはる項目に○チェックする方法は簡単だった ・余裕のある時間に書いていた
	・自分のものと意識し、楽しんで記載した	「*結構楽しみながら、こんなこともあったなって、振り返れるし、大変ってことはなかったです*」 「*私の日記だから書きやすかったです*」
	・記載にとまどった時があった	「*子宮収縮抑制剤の副作用による手の震えがあり、自由記載が出来ないときがあった*」 「*書き方はこれでいいのかと思いました*」
	・記載を面倒に感じた時があった	・あいまいな表現は自由記載を利用した ・毎日の自由記載が同じような内容になった 「*毎日の記載を面倒に感じたこともあった*」
②Maternity diaryを活用し感じた効果	・気持ちの変化や貴重な体験の振り返りとなった	・読み返すと気持ちが変わってきていたのがわかった ・振り返った時に貴重な思い出になると感じた
	・一日の記録・気づきのメモになった	・毎日の出来事を記録として残すことができた。 ・客観化でき、自分の気持ちを知ることができた ・妊娠経過を毎日書き、変化が解りやすかった 「*日記は自分の記録みたいになっていましたね。この、妊娠何週だとかは、毎日書いていたので、解りやすかったです*」
	・不安を助産師に伝えることができた	・不安を言い出さなくても、読んでもらい判ってもらった 「*言いにくいというか、わざわざ引き留めてまでいうまでもないけど、不安におもった ことも気になったことも書けた*」
	・家族とMaternity diaryを使用することで入院中の出来事を共有できた	・夫に記載を依頼することもあった ・記載内容を、家族と振り返ることができると感じた ・H氏「*家族とこんなことあったねって話ができますね*」
③Maternity diaryを通した助産ケアに対する思い	・助産師とMaternity diaryを読み、思いを共有した	・笑顔で丁寧に日記を見てくれた 「*ダイヤリーを見て「そうだよね」「やっぱり、心配だよね」って聞いてもらえた*」
	・助産師の声掛けで安心した	「*頻繁に「大丈夫？」って聞いてくれて「ああいいな」って思いました*」 「*質問しても答えてくれたし、この部屋にいても大丈夫？とか、そういう精神面のケアに気を使ってくださっているなと思いました*」

D．出産後４日目面接時の妊婦の思い（表５）

面接で得られた逐語録の分析を行った結果、【妊娠生活の振り返りができた】【自分自身の心の整理ができた】【助産師とのつながりを感じた】の３カテゴリーが抽出された。

１．妊娠生活の振り返りができた

『妊娠満期、出産後とMaternity diaryを読み返す機会があった』では、「*入院した時は、こんな感じだったんだなって、頑張っていたなとわかる*」（A氏）の語りから分かるように、切迫早産妊婦は、MFICU入院中のみならず妊娠各期の様々な場面でMaternity diaryを読み返していた。そして、出産後も『Maternity diaryを読み返すことで、入院生活や妊娠生活を振り返ることができると思った』と感じていた。

２．自分自身の心の整理ができた

切迫早産妊婦は、『Maternity diaryに文章として記載することで、気持ちが伝わりやすいと思った』『思いを書いて表現することで、心の整理に繋がった』と、Maternity diaryを使用したことで、他者に直接言葉で伝えることが難しいメッセージをMaternity diaryに思いを表現し、気持ちの整理と精神的な落ち着きを感じていた。

３．助産師とのつながりを感じた

『Maternity diaryを読んでもらうことで、つながりを感じた』では、「*つながりというか、自分の状態を気にかけてもらっているんだなっていう、安心感ですかね*」（F氏）の語りにみられるように、切迫早産妊婦は助産師とMaternity diary の記載内容を共有することで、Maternity diaryを通して助産師との関わりに連帯感を感じていた。また、助産師との会話については、Maternity diaryに記載していた自分の疑問を受け止め、『質問に何度も答えてくれた』と助産師の対応に満足感を持っていた。

Ⅳ．考察

A．Maternity diaryに記載された切迫早産妊婦の思い

Maternity diaryに記載された切迫早産妊婦の思いは、それぞれの感じた疾患に対する不安や身体的苦痛とストレス、そして胎児に対する思いであった。これまで、MFICU長期入院中の切迫早産妊婦の不安の内容として、治療・処置や胎児の発育に関連した想い、MFICUの環境や医療者の対応、孤独感を抱きやすく胎児の事を常に考えていたことが報告されている（中澤・阿部・松木他，2008）。これらの内容は、本研究でMaternity diaryに記載されていた切迫早産妊婦の思いと比較しても差はなく、MFICU入院中の切迫早産妊婦はMaternity diaryの記載を通し、自身の置かれた状況や疾患の症状を客観的に受け止め、思いを表現することが出来ていた。

また、Maternity diaryの記載内容の中には、夫や上の子など家族の面会時にMaternity diaryを読み返す、そして、一緒に記載する場面があった。このように、面会時、家族とMaternity diaryを共有する行為は、家族にも自分の頑張りを分かって欲しい、共有して欲しいという思いがあったためと推測される。Maternity diaryを家族と共有することは、入院によって家族と離れて生活している切迫早産妊婦にとって、非常に嬉しく、精神的に癒される体験であったと考える。Maternity diaryを、MFICU入院中の切迫早

表５．出産後４日目面接時の妊婦の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
①妊娠生活の振り返りができた	・妊娠満期、出産後とMaternity diaryを読み返す機会があった	・妊娠満期になった時に何度か読み返した ・出産後に振り返って読んだことがあった
	・Maternity diaryを読み返すことで、入院生活や妊娠生活を振り返ることができると思った	・読み返せるところが良かった 「*入院した時は、こんな感じだったんだなって、頑張っていたなとわかる*」 ・読み返すと懐かしく思うのではないか 「*子供が大きくなってから読み返すんじゃないかな*」
②自分自身の心の整理ができた	・Maternity diaryに文章として記載することで、気持ちが伝わりやすいと思った	・文章にすると伝えやすいと感じた 「*言いたいこと言ってっていわれても、なかなか言えないので、言いたいことを手紙やメールに託して伝えたりしています*」
	・思いを書いて表現することで、心の整理に繋がった	・書く方が自分の思いを表現できた 「*書く方が自分の思っていることを出せると思いました*」 ・書くことで精神的に落ち着いた 「*くる日もくる日も変化のない毎日だったので、心の整理の意味もありました*」
③助産師とのつながりを感じた	・Maternity diaryを読んでもらうことで、つながりを感じた	・助産師に読んでもらうことで、気にかけてもらったと感じた 「*つながりというか、自分の状態を気にかけてもらっているんだなとっていう、安心感ですかね*」
	・質問に何度も答えてくれた	・同じ内容を何回か聞いたが、よく対応してくれた 「*私、何回も聞いていたんですよね。みんなよく答えてくれて助かりました*」

産妊婦と家族が入院中の出来事を共有する目的で使用することは、双方の共通理解に繋がり、精神的安定に有効であると考える。

B．Maternity diary を使用したことによる効果

MFICU入院中、Maternity diaryを使用した切迫早産妊婦は、出産間近の妊娠満期や、出産後もMaternity diaryの読み返しを行っていた。MFICUにおける入院生活は、様々な不安やストレスを感じた体験であり、Maternity diaryには、その内容が記載されている。記載していた妊婦自身がMaternity diaryを読み返すことで、MFICU入院中に、毎日自分がどんなことを感じ乗り越えてきたのか、妊娠生活を振り返ることで自己評価を行っていたと考える。切迫早産妊婦自身が思いや体験を自己評価することが自信に繋がり、その後の出産や育児に対し、前向きに意識調整を行う機会を得ていた。

今回使用したMaternity diaryは、MFICU入院中の切迫早産妊婦に対するセルフモニタリング用チェックシートとしての効果が期待できた。土田･福島（2007）は、セルフモニタリングとは、行動調整に関する情報収集過程であるとともに、行動の調整をプランニングする過程であると述べている（p.89）。MFICU入院中の切迫早産妊婦は、Maternity diaryに記載されていた切迫早産の症状と自身の行動について読み返すことで、子宮収縮を感じやすい行動を避ける、もしくは、感じにくい安静の体勢を工夫するなど慎重に入院生活を過ごすことが出来ていた。MFICU入院中の切迫早産妊婦は、自ら記載していたMaternity diaryから判断に必要な情報収集を行い、自己の行動が重要であることに気付き、客観的に受け止めて自己評価することでセルフケア行動を取るといった行動変容へと繋げていた。このことから、Maternity diaryが持つ、セルフモニタリングの効果は、入院中の切迫早産妊婦がセルフケアを行うために有効な方法であることが示唆された。

Maternity diaryを使用した切迫早産妊婦は、症状の進行に対する不安の中、胎動を児とのコミュニケーションと感じたこと等、胎児に対する愛着をMaternity diaryに記載し、入院生活を共に過ごす胎児に対して特別な思いと共感を抱いていた。Maternity diaryに胎児に対する語りかけを記載することは、より胎児を身近で愛着あるものとして感じることができ、母子関係の基礎となる胎児への愛着形成を促す効果が期待できる。更に、Maternity diaryを胎児へのメッセージとして使用することで、児と対面できる出産に対して期待感を持つことができ、妊婦としての幸福の実感へと繋がっていくと考えた。

C．Maternity diaryを使用した助産ケアの検討

唐澤・上條・坂口他（2005）は、切迫早産妊婦の入院中の思いと看護者への期待について、看護者は切迫早産妊婦の気持ちを敏感に感じること、思いを表出できる環境をつくることが必要であること、看護者自身が妊婦にとって精神的な支えとなることが求められると述べている。助産師とMFICU入院中の切迫早産妊婦が、直接会話を持ちながらMaternity diaryを一緒に読み返すことで、助産師は切迫早産妊婦の表情や言葉から敏感な心理状況の変化を察知することができ、切迫早産妊婦はMaternity diaryを話題とすることで話しやすい雰囲気作りができると考える。松浦・吉沢（2011）は、ハイリスクな状況にあるからこそ時間をかけ、妊婦の心理的状況の変化を敏感に察知しながら寄り添う必要性や、切迫早産妊婦の入院生活の中で他者との会話が重要であり、入院生活の気分転換や情報収集の場となっていると述べている（p.652）。助産師とMFICU入院中の切迫早産妊婦、両者の会話が進むことで、よりよいコミュニケーションを図ることができ、信頼関係の構築に繋がることが期待できる。このようなMaternity diaryを通した助産師と切迫早産妊婦の関わりは、妊娠継続を含めた目標を共に設定し目指していく動機となると考えられる。戸川・徳原・西本他（2009）が、妊婦と共に妊娠継続をしていくうえでの目標や見通しを一緒に立てていくことが妊婦の安心感につながると述べている（p.43）ように、Maternity diaryを使用した助産ケアは、助産師が切迫早産妊婦に、より個別関わる機会となり、入院生活への安心感へと繋がると考えた。

また、助産師が、MFICU入院中の切迫早産妊婦の精神的な支えとなるためには、十分な情報収集と観察に基づいた、妊婦の全体像の把握が求められる。しかし、すべての助産師が同じように情報収集を行うことは困難な場合もある。そこで、切迫早産妊婦が個人の体験や思いを記載しているMaternity diaryを助産師が必要な情報収集の手法として活用することで、どの助産師も同じように情報を得るために有効であることが示唆された。

切迫早産妊婦の入院中の目標は、可能な限り妊娠継続することで、妊娠満期の出産を目指すことである。しかし、実際には目標に達する前に早産となる可能性も高く、助産師は早産に至った場合、精神的なフォローが求められる。森島・國清・掘込他（2011）は、早産で出産した母親には、産褥早期に妊娠中の経過から振り返り、その時の体験をどのように受け止めているのか確認し、意味づけの支援をすることが必要であると述べている。Maternity diaryは、切迫早産妊婦自らが入院期間中の体験を記載したものであり、産褥早期の振り返りと意味づけ行う場面で活用が可能である。出産後の振り返りにおいてMaternity diaryを読み返し、助産師も一緒に関わることで、産婦は自身の入院生活を有意義であったと受け止め、共に頑張った児への愛着を深めることができるのではないかと考える。

そして、出産の先にある育児に対するモチベーションにもプラスに影響を与えることで、前向きな育児姿勢と良好な母子関係への発展に結びつくことが期待できることが示唆された。

D．研究の限界

本研究は１施設での使用であること、また、対象の背景を十分揃えることができなかった。そのため、すべてのMFICU入院中の妊婦に一般化することは控える必要がある。今後は、Maternity diaryを継続使用し、対象数を重ね、MFICU入院中の妊婦の心の支えとなる助産ケアを提供できるよう検証していきたい。

Ⅴ．　結論

1．MFICU入院中の切迫早産妊婦は、Maternity diaryを使用することで毎日の自身を客観的に受け止め、振り返ることができ、思いを表現することができていた。
2．MFICU入院中の切迫早産妊婦は、Maternity diaryに胎児に対する語りかけを記載しながら、胎児への思いを深め、母子関係の基礎となる愛着形成を促していた。
3．MFICU入院中の切迫早産妊婦に対するMaternity diaryの効果は、セルフモニタリングの効果から、自身の思いや体験を評価でき、セルフケアへの行動変容をもたらしていた。
4．従来のケアにMaternity diaryを加え助産師が関わることで、妊娠生活の受け止めと目標への見通しを立てる機会となり、よりよい助産ケア提供の一助であることが示唆された。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究へのご協力を承諾してくださいました妊婦の皆様に心より御礼申し上げます。また、本研究の趣旨をご理解下さり、ご協力、ご指導下さいました病院管理者の皆様、病棟スタッフの皆様に心より御礼申し上げます。また、本論文をご指導下さいました日本赤十字秋田看護大学大学院看護学研究科助産学教授 加藤尚美先生に心から感謝いたします。なお、本研究は日本赤十字秋田看護大学大学院に提出した修士論文の一部を修正・加筆したものである。

文献

兼子奈保美，冨樫昭子（2010）．MFICUの入院環境に関する妊婦の思い．秋田県母性衛生学会誌，24（12），11-16.

唐澤千秋，上條陽子，坂口けさみ，湯本敦子（2005）．切迫早産妊婦の入院中の思いと看護者への期待．日本看護学会論文集：母性看護，36，143-145.

眞鍋えみ子（2005）．妊婦におけるセルフモニタリング用チェックシートの作成．日本助産学会誌，19（1），6-18.

松浦志保，吉沢豊予子（2011）．BedRest治療を余儀なくされた妊婦の心理状況の記述－入院から入院後２～３週間まで－．母性衛生，51（4），647-653.

森島知子，國清恭子，堀込和代，平川君恵，常盤洋子（2011）．早期産で低出生体重児を出産した母親の出産体験に関する検証研究，北関東医学，61（1），15-23.

長濱輝代，石崎優子，北村直行，金子一成（2007）．母体胎児集中治療室入院妊婦の心理特性－Profile of Mood States（POMS）による検討－．生活科学研究誌，6，1-7.

中澤恵美里，阿部慈，松木由美，檜原直美，酒井直子，中倉宏美，池内和代（2008）．切迫早産でMFICUに長期入院を必要とする妊婦の不安－妊婦の面接から－．香川母性衛生学会誌，8（1），50-56.

中村康香（2009）．マタニティダイヤリーを妊娠初期から妊娠末期に継続的に使用した効果について．母性衛生，50（1），42-47.

戸川優子，徳原多賀子，西本吉江，長井理恵子，藤井郁，新谷眞里子，木戸久美子（2010）．MFICU入院中の妊婦の思いと看護への要望．日本看護学会論文集：母性看護，40，42-44.

土田恭史，福島脩美（2007）．行動調整におけるセルフモニタリング－認知行動的セルフモニタリング尺度の作成－．目白大学心理学研究，3，85-93.